



マッピングとモデル化

こんにちは、菅俊一です。今回は、みなさんの身体を使って「マッピングとモデル化」という概念について考えていきたいと思います。早速ですが、いまみなさん自身が右手の人差し指の先端にいるとします。そして、みなさんの実家がある場所を左手の人差し指の先端としてみましょう。そのとき、右手の人差し指で左手の人差し指を直接接触するという行為は何を意味すると思いますか？

それぞれの指に当てはめられた情報から、いまの行為を「直接自分が実家にアクセスする」と捉えると、たとえば、「実家に電話をかける」というコミュニケーションとして解釈できるかもしれませんし、もしくは「車で直接実家に行く」という物理的な移動として解釈できるかもしれません。

では、この対応関係のまま、今度は右手の人差し指で左手の手首に触れてから、そのまま左手の人差し指の先までなぞっていく行為は、何を意味すると思いますか？ちょっと考えてみてください。



いかがですか？先ほどは「直接アクセスする」という視点で話をしていましたが、今度は「目的地の少し手前にアクセスしてだんだん近づいていく」ということをしてもらいました。これについても色々な解釈ができると思いますが、たとえば「実家の最寄駅まで電車で移動してから、歩いて実家まで行く」という解釈もできそ

うです。

それではもし、右手の人差し指が触れる位置が手首ではなくもう少し離れた左肩で、そこから指先まで辿る動きだったら、どのような解釈が生まれるのでしょうか。

きっと手首のときよりもっと離れた場所から、結構長い距離を歩き続けるイメージになったのではないのでしょうか。今回、みなさんには身体のいくつかの部位に特定の場所を当てはめる（マッピングする）ことで、それを手掛かりとした距離感と移動感覚のモデルを頭の中につくってもらいました。

無限のスケールを取り込む抽象化

私たちは、一度頭の中に対応関係をつくってしまえば、どんなに遠い距離についても限られた空間の中で扱うことができます。先ほどは、いまいる場所と実家との関係で考えてもらいましたが、太陽と地球といった広大なスケールでも、2つの細胞のような極小のスケールでも、左右の人差し指の関係で考えることができます。

これは、私たちが抽象化という、実物をそのまま扱うのではなく、構造や特徴だけを取り出して扱うことができる想像力を持っているからこそできることです。様々なスケールの物を強引に身体に当てはめて考える今回のような体験をしてみることで、未知の存在や問題に対しても、手のひらの上で身近な問題として考えてみる事ができるのです。



PROFILE 菅俊一 (SYUNICHI SUGE)

コグニティブ・デザイナー。表現研究者。映像作家。多摩美術大学美術学部統合デザイン学科准教授。1980年東京都生まれ。人間の知覚能力に基づく新しい表現を研究・開発し、様々なメディアを用いて社会に提案している。主な仕事・著書に、NHK Eテレ『2355/0655』、『観察の練習』、『ヘンテコノミクス』など。